



神経病態解析学

本セミナーは、HBS研究部・神経病態解析学分野（准教授・笠原二郎）が不定期に主宰するセミナーシリーズで、聴衆（特に若者）への刺激とブレインストーミングを目的に、ジャンルを問わず各界の最前線でユニークな活躍をされている方々をお招きし、お話しして頂きます。研究部の多くの学部生・大学院生・教職員の参加をお待ちしております。

セミナー

awajiroの

わがままセミナー

シリーズ

連絡先：笠原 二郎 awajiro@ph.tokushima-u.ac.jp

Tel&Fax: 088-633-7278 (学内: 6256)



サマースペシャルエコロジーセミナー

おおた なおとも

シリーズ第8回 演者：大田 直友 博士

阿南工業高等専門学校・建設システム工学科・准教授

演題：生態系の創出は可能か？

—徳島県の二つの人工干潟の現状と課題—

開催日時：2011年7月22日（金）17:00~18:30

開催場所：薬学部 2F 多目的室（スタジオプラザ2F）

薬学と環境生態系…一見あまりつながりを感じないかもしれませんが、近年アメリカ五大湖の湖水から抗うつ薬SSRIであるフルオキセチンが微量検出され、これが湖水微生物をはじめとした生態系に悪影響を及ぼす可能性が強く懸念されています。実際セロトニンを主要な神経伝達物質とする水生生物の存在はよく知られています。このように私たちは意図せずに周辺環境に様々な破壊をもたらしているようです。私たちにも身近な徳島の干潟を研究する海洋生物学者・大田博士のダイナミックなお話を伺いましょう。

講演要旨

汽水・浅場環境においては、ヒトの繁栄と引き替えに世界の約65%の湿地や藻場が失われ、さらにこの2-3世紀にわたる生物資源の収奪・搾取や生息地の破壊による生物多様性の損失は著しい (Lotze et al. 2006)。日本でも戦前に比べ40%もの干潟が失われ (環境省 1980, 1998)、それに伴う絶滅危惧種の増加、生態系サービスの劣化が社会問題になっている (例えば、諫早湾干拓と有明海の異変)。さらには、ヒトによる地球環境の改変は深刻かつ拡大の一途をたどり、いまや地球上の自然環境は、「自然の摂理」ではなく「ヒトの摂理」により制御されているという (Vitousek et al. 1997)。よって人類が生態系サービスを持続的に享受するためには、不安定、非平衡、不確実な生態系に積極的に関わりをもちながら、健全な生態系を持続させるための生態系の復元や管理方法の確立が喫緊の課題となっている (鷲谷 2001)。

本研究では、ヒトが関与して創出された二つの人工干潟における底生生物（ベントス）の生活史特性に注目する。二つの人工干潟は、創出された経緯や創出後の時間、さらには底質の状況、分布する生物は全く異なる。しかし、あえて共通する課題や特徴を串刺しにすることで、干潟復元における課題が浮かび上がってきた。そのうえで、生物多様性が高い干潟生態系の復元・創出に向けての方向性やその可能性を考察する。